

国内研修レポート

(1) 研修場所

岩手県の釜石市を訪問した。

(2) 団体概要

私の所属している「スタートしよう東京の学生にできることを」（以下スタ学）という団体は2014年の夏から釜石市にある甲子仮設住宅を何度か訪問している。スタ学の活動内容としては大きく2つあり、一つ目は仮設住宅内で配られる情報誌「かまたま」の作成、（詳しい内容は(5)で述べる）二つ目は仮設住宅内で行われるイベントの企画・運営である。今回の訪問では8月3日に行われたイベントの企画・運営を主に行った。

(3) 活動内容

5月中旬から企画概要について週に1度スタ学全員で集まり会議を行った。6月にはイベント内容を決定し、班に分かれて準備を行った。当日のスケジュールとしては

7:14 東京発

12:00 釜石市 甲子仮設住宅着 イベント準備開始

14:00 イベント開始

18:00 イベント終了

という流れで行った。

イベントは夏祭りをテーマにした。そのため、出店（射的、チョコレートファウンテン、たこやき）を学生側が事前に準備して出店したり、流しそうめんを甲子仮設の方に準備していただいたり、釜石で踊られている「釜石よいさ」を学生が事前に覚えて浴衣を着て披露するなどした。また、前回私たちが参加させていただいたイベントの中で好評であった仮設住宅内の住民の方と学生と一緒に合唱も行った。

(4) 活動を通し気づいたこと・課題

今回、私は釜石市の甲子仮設住宅に訪問するのは4度目であったが、釜石市に「ボランティアに行っている」という感覚が今までは強かったのだが、今回の訪問では「釜石市の住民の方々に会いに行く」という思いが変わっていた。初めて釜石市の甲子仮設住宅を訪問した時は昨年であり、私は被災地を見るのも、仮設住宅を見るのも初めての経験であった。そのことから住民の方々とどのようにコミュニケーションをとっていいかわからず混乱し、自分に何ができるのだろうかという疑問が心の多くを占めていた。しかし何度か訪問を重ねていくうちに、私たちの活動に協力をしていただいている釜石市社会協議会の方々、釜石市甲子仮設住宅の自治会の方々と私たちとの距離が密になり「ボランティアをする側、される側」という関係ではなく「個々人同士の関わり」という関係に変わってきた。それと同時に自分がボランティア活動として何かしなければいけないのではなく、自分が釜石の方々とどう関わられるか考えたうえで、自分たちのやりたいことをどんどん提案していこうという考え方に変わった。その考え方の変化によりこの活動を以前より楽し

く・やりがいを感じながらすることができた。

イベントの準備の段階では釜石市に今回初めて行くというメンバーも多く、モチベーションも大きく違う中のスタートの中となった。しかし、釜石市に何度か行ったことがあるメンバーが現在の仮設住宅の状況を話し、その中で何ができるかについて全員の意見を聞き、モチベーションアップを図った。今回は夏祭りをテーマにするということで、プレハブ造りで無機質である仮設住宅をどうしたらお祭りのような雰囲気作りができるか、という点について重点を置いて話し合いを行い、折り紙や画用紙などを使いそれぞれが手作りで装飾を作成した。その作成過程の中でスタ学の気持ちの上での方向性がまとまっていったと感じた。

イベント当日は行きの電車が遅れてしまうなどのハプニングもあり、イベントの準備を急いで行ったが、その中で住民の方とスタ学全員が交流できた。またイベント中も仮設住宅の方々とたくさん交流ができ、ゆっくりと話す時間は取れなかったがそれぞれが仮設住宅の方々との思い出が作れたと思う。

イベント後の釜石滞在時は創作農家「こすもす」で丸太運びのボランティアの後、併設している遊具が手作りで作られている公園にて遊具を体験させていただいたり、スタ学の活動に当初から協力していただいている社会協議会の方に釜石市を案内していただいたりととても楽しい時間が過ごせた。この経験によっても釜石市は私たちにとってボランティアをしにしている場所としてではなく、自分の大切な場所が変わっていったと感じた。

課題としては事前にイベント当日についての打ち合わせが足りなかったと感じた。そのため準備の段階で何をしたら良いのか分からないメンバーや、タイムスケジュールを理解していないメンバーがいた。このことから次回からは一人一人がイベント当日どう動くかについて把握しておく必要があると感じた。また、今回初めて釜石市に行くメンバーは被災地についての勉強する時間が足りなかったと感じ、何回か足を運んでいるメンバーでもこれから被災地を、釜石をどうしていきたいかという点での意見交換ができていなかったため、今回のイベントが終わってしまった後、何をしたいか分からなくなってしまう点が課題であると感じた。目の前にある夏祭りイベントばかりに気をとられてしまい、当団体の目標である「東京にいる学生が被災地に何をしたいのか」についての意見交換や、それぞれの被災地に対しての目標を同じところに定めていくという過程が足りなかったのではないかと感じた。

(5) 今後の活動について

私たちが継続的に行っている甲子仮設住宅は2016年の夏には集約があり、住民の方々は復興住宅に移ったり、別の仮設住宅に移ったり、自立再建をしたり、バラバラな道を歩いていくことになる。すなわち、またコミュニティを1から作り上げていかなくてはならないのだ。コミュニティができないと、些細な事による隣人トラブルの増加、孤独死、アルコール依存症、幼児虐待等多くの問題が起こることが危惧される。このことから、これからの数年間が特に被災者の「こころのケア」にとって大事な年といえるであろう。こ

のことをスタ学全員が認識したうえで釜石市にどう関わっていきたいかについて今回のイベントの反省を含め意見交換する必要性があると感じた。

また、他の団体（他大学のサークルやNPOなど）の被災地支援団体の活動や、ニュース報道などで被災地のことをも一度勉強しなおし、ニーズの把握をし直す必要もあると感じた。

そのことに加えて継続的に行ってきた情報誌（①甲子地区イベントカレンダー：甲子地区にある4つの仮設住宅で行われているイベントの情報をまとめたもの。仮設住宅が異なっても交流してもらうことを目的とってもらうためのもの。②スタ学の学生が、大学でどんなことを学んで、また学外でどんな活動をしているのかを釜石甲子仮設の皆さんに知ってもらうために設けたもの。③リレーインタビュー：甲子仮設住宅の方に学生が電話等でインタビューをし、それを記事にする。この3つの記事を中心に載せている情報誌）「かまたま」の発行、今後のイベントの企画も合わせて行っていきたい。

（6）全体のまとめとして

東日本大震災から4年以上たった現在では被災地関連のニュース報道がかなり減っている。そこで現在何人の人が被災地の現状について知っているかという問題がでてくるであろう。現在もなお東日本大震災の影響で苦しんでいる人が多くいる中、若い世代の私たちが被災地のことについて積極的に勉強していき、またそれを多くの人に知ってもらうことがこれからの時代、特に必要となってくるであろう。これはスタ学の課題ではなく、日本全体の若者の課題であると思うのでこのスタ学の活動にとどまらない活動の必要性を感じた。どうしたら被災地の現状について知ってもらえるか、今後重要視し、活動を行っていききたいと思う。